

新しい悦びの時代へ向けて

NPO法人
くだけけ会代表
和田重良

1948年小田原市生まれ
くだけけ生活舎での共同生活（人
生科や農作業）をとおして、青少
年や家庭の生活にさまざまなメッ
セージを送っている。



人生においても、教育を考えるためにも、一人一人にとって「今をどう生きるか」が大切なことであることは言うまでもありません。過去を悔んで、また未来を憂いてばかりでは新しい時代を生み出せません。今日からイキイキと生きましょう。何歳からでも…。

オ二回 出すことの大切さ

クソの役割

子ども日めくりの「目的をつかむ」ことがとても重要なことであることとは何となくわかるのですが、あまり突き詰めて求めてみることはありません。そこでウツカリすると食べるだけ食べて出すことを忘れてしまおうとか、出すのが面倒だから栄養分だけ摂ろうとか考えてしまおうのです。多くの言いたいのは「丸ごと食べて、いらぬも

のはさつさと出す」ってことです。または「出す」方を中心にコントロールしていけば入ってくる方もスムーズになるってことでもあります。

健康や体力の維持という目的からすると出すことはとても大切ってことなのです。

足し算・引き算

人間の生活のバランスってのは、表もあれば裏もある、足し算もあれば引き算もあるってことでしょう。そこで、いろいろ詰め込み過ぎた社会の中で「引き算思想」が流行っているようですが、これって「やり過ぎだから減らしましょう」という程度で少しハンパかなと思っっています。人生はそう単純ではないから根本から考えます。

小学生に足し算と引き算を教えてみると、足し算はすぐ分っても「引く」ということがどうしても理解できない子がいます。難しいのでしょね。

算数で教えるのは、ゼロ（空っぽ・何もない）というところから引くという思想がなくて、あるところからマイナス方向に足していってただけですから、足し算の裏返しで理解させようとしているのです。

いろいろと面倒な説明になりそうなのでこの辺で、話を「教育」のことにすると、子どもの能力ってのは常に「足し算」のように伸ばして行きたいと願うわけです。「これができたから次はこれ」と言うようにどんどんプラスしていけばどこまでも伸びると思うわけです。

実際ほとんどの子が中学生頃までは能力の足し算で伸びて行っているように思えるのです。

ところが、その方式でやって来た子が中学や高校でまったく伸びなくなってしまうなんていう例を見るわけです。又は、かろうじて学校の成績はなんとかついて行ったけれども、実際に何の役にも立っていない人を見たりするのです。

多くは長年、不登校の子や不良の子たちと接してきた中で、能力ってのは単純に「足し算思想」ではダメ（要するにしあわせ感がない）だと思っようになったのです。

人間の能力ってことを量るとき、いつもゼロ（空っぽ・何もない）という所に立ち戻ってみるということがいいと発見したのです。

そうじゃないと、足りないものばかりが目につ

て、「意欲」という人間の精神活動の中ではとても重要な能力を発揮し損なったり、歪んでいったりしてしまうのだと思っただのです。

「まず、出す」という出発

能力をゼロ（空っぽ）にするというのは出発点に立つということなのです。

これは、いつでも出発なのですから、「まずは出す」ということで能力の引き算になります。能力を取り込んだり付け加えたりしなくていいのです。

「よいことをさせよう」とか「思い通りにさせよう」とかは思わないようにしたのです。

まず出発点（ゼロ）からやって行けるものから出しはじめていくとゼロからマイナス方向への引き算のようだけれども「意欲」は満たされて足し算になって行きます。ですから、余分なものを捨てると

いう引き算だけではなくて、ゼロ（空っぽ）に立つてそこから出発するとまず能力はゼロからの引き算となり、そこには能力は出すと「こちよ」と実感できる仕組みがあるのです。

「勉強」も「人生」もつらいからこそ頑張っ歯をくいしばってやらなければならぬというよりも、「やってみたらこちよいいからもっと頑張ってみよう」…少しぐらいつらくても…というもののなのです。

昔、書いた『両手で生きる』という本（現在、相模原くだけけ会でテキストに使用中）の中に「百姓勉強、クズヤ生活」という文が出て来ます。

まだ若い頃に書いたのでこなれの悪い話なのですが、いろいろな子どもたちと共同生活をしていて中

で感じたことなのです。

百姓は何もない所（ゼロ）で生産的な暮らしをしていく象徴であり、クズ屋はその生活で利用したもののカスやゴミを再利用したり、処理したりする生産的な暮らしの象徴なのです。

ゼロから出発して、ゼロに戻る。これがぼくらの生活や教育の理想です。

